



Veritas No.39(2008.12.19)

目次 (敬称略)

海を越えた『源氏物語』—王朝文学の琉球伝来について—
～特集『源氏物語』千年紀に寄せて～
真栄平 房昭 (図書館長)

<特集 『源氏物語』千年紀に寄せて>

藏中 さやか (総合文化学科)
飯田 祐子 (総合文化学科)
浜下 昌宏 (総合文化学科)
井出 敦子 (院長室職員)
吉本 智恵 (文学研究科)
東川 博子 (文学研究科)
山田 梨絵 (英文学科)

<研究室から>

山本 義和

<史料室から>

佐伯 裕加恵

<AV ライブラリーからのお知らせ>

西野 美香

<神戸女学院大学図書館架蔵フランス語書目雑談 II >

—V・ユゴー『クロムウェル』初版本（1828年）について—（その2）

柏木 隆雄

<図書館からのお知らせ>

図書館

無断転載を禁ず

〈海を越えた『源氏物語』—王朝文学の琉球伝来について—〉

真栄平 房昭 図書館長 総合文化学科教授

「源氏物語」千年紀、この王朝文学が記録の上で確認できる年から、ちょうど千年の節目を迎えた2008年、これを記念して多彩なイベントが催されている。すでに江戸時代には出版文化の隆盛にともなって、「源氏物語」を題材とした写本・版本が数多く刊行され、普及していた。これにより源氏は、近世の庶民教科書、双六、往来物などにも幅広く受容され、また遊里でも格の高い遊女が身につけるべき教養の一つに数えられた。

19世紀には、柳亭種彦による翻案小説『脩（にせ）紫田舎源氏』が、爆発的なブームを巻き起こした。これは平安の王朝文学を、室町時代の足利将軍家のお家騒動に移し替え、光源氏の代わりに、武勇と美貌を兼ね備えた主人公、足利光氏が好色を装いながら逆臣の陰謀に立ち向かうストーリーで、庶民の人気を博した。



図1「和歌三神扇合 松葉屋内
喜瀬川」(九曜文庫蔵) <図1>

この絵（図1）は、江戸中期の浮世絵版画である。江戸の吉原で評判の遊女が膝の上に本を広げ、くつろいだ様子で読書を楽しむ様子が描かれている。片ひじをついた手前の黒い本箱には、「源氏物語」とある。このように遊里の女が、さりげなく王朝文学に読みふける姿からも、近世社会における「源氏物語」の浸透ぶりがうかがえる。

◇近世琉球における和文学の受容

次に、視点を変えて、琉球との関わりについて述べてみたい。近世の琉球では海外交流によって中国文化や漢籍を受容する一方で、和文学も意外に広く流布していた。池宮正治氏によると、琉球の古辞書『混効験集』（1711年）には、「源氏物語」の引用が32例、「伊勢物語」が14例ほど確認されている。

また、那覇士族であった阿嘉直識の遺言書（1778年）には、子孫が学ぶべき教養として、「源氏」や「伊勢」、「徒然草」などのほかに二条流の歌書、「古今和歌集」、「千載和歌集」、「為家卿集」といった和歌の啓蒙書があげられている。「和書は、伊勢物語・源氏物語・徒然草などの書、精を出し、和漢共に月にねり、歳にきたひ、年々歳々に怠らざる様に、気根を養ひ随分相励み、相学ぶべき事」と、和風の教養を習得することを奨励したのである。これらの書物は、琉球ではまず実用的な面から受け入れられた。その実用とは和歌を詠むことであり、「源氏」や「伊勢」は和歌の参考書として読まれたのである。

この種の和風文化が主に士族層に受容されたことは、別の史料によっても明らかである。1762年に薩摩へ貢租を運ぶ途中で台風に逢い、土佐国（いまの高知県）宿毛大島に漂着した琉球船の乗組員からその国情を聞き書きした『大島筆記』に、興味深い記事がみえる。土佐藩の儒者戸部良熙の質問に対して、琉球士族の潮平親雲上は、「琉国にて源氏・伊勢・徒然草など何れも常々見申す杯いへり、此度の船中にも伊勢・徒然を携へり。謠も内外二百番渡り有て、謠ふ事也。浄瑠璃本は近松が作多有り、近年のも来る由いへり」と答えている。つまり、「源氏」・「伊勢」・「徒然草」等の書物を船旅に携行しており、また謡曲や浄瑠璃本、近松の新作なども伝来していたことがわかる。

「伊勢物語」は、とくに歌人の間では必読本であったようだ。沖縄三十六歌仙の一人で、尚育王の摂政をつとめた浦添王子朝熹（尚元魯）の旧蔵本が、今日に伝わる（琉球大学図書館・島袋源七文庫蔵）。その後書きから、尚柏本の系統であることが知られている。

では、これらの和書はどのような経路で琉球まで流布したのであろうか。まず考えられるのは、鹿児島から那覇へ赴任した「在番奉行」とその周辺ルートである。さらに、琉球王府の役人たちが薩摩や江戸に旅する機会に、和書を購入して持ち帰った可能性も高い。

いずれにしろ、戦前の沖縄県立図書館には和漢の書物が多く収蔵され、なかには島津家から尚王家に贈られた豪華な「源氏物語」もあったという。和文学の地理的伝播という意味で、沖縄は日本列島のまさに「南限」にあたる可言えよう。こうした貴重な書物が第二次大戦の戦火で灰燼に帰したことは実に残念だが、「源氏物語」がはるばる海を越え、琉球

まで伝わった「歴史の記憶」だけは、永遠に残る。

*参考：池宮正治「沖縄の文学に及ぼした『源氏物語』」
（『国文学解釈と観賞』第40巻5号）



<図2> 浦添家本『伊勢物語』

図1) 京都文化博物館(<http://www.bunpaku.or.jp/>)「読む、見る、遊ぶ 源氏物語の世界」展より転載

図2) 琉球大学附属図書館 HP より転載
<http://www.lib.u-ryukyu.ac.jp/digia/tenji/tenji2004/>

<特集 『源氏物語』千年紀に寄せて>

藏中 さやか 総合文化学科准教授

『源氏物語』千年紀に寄せて・雑感

今年は全国各地で『源氏物語』を巡る催し、文化現象が目白押しである。

世間がこぞって、これほどまでに『源氏物語』に注目するとなると、『源氏物語』研究者ならずとも、日本古典文学を研究する者であれば、『源氏物語』から発生したうず潮が、我が国古典文学全般への関心の高まりを巻き起こすものであって欲しい、またその関心は裾野を広げつつ継続していくものであって欲しいと願うものであろう。さらに、これまでに集積され、そして今後も展開されていく研究の成果は、限られた研究者だけのものではなく、広く人々に紹介、還元され、さらに新たな興味を喚起していくものでなければならない、ということにも思いは及ぶ。研究者に課されている使命は重い。

感じるものが一つある。『源氏物語』愛好者は広く深く作品を知っているということ。

稿者のような者でも、生涯教育の現場からお声がけをいただき、『源氏物語』の講義をするという経験を有するが、聞き手の皆様は、一様に、相当の「源氏通」であられた。無論、これはかつての我が国の国語教育の賜物に違いない。しかし、その興味が学生時代の勉学や読書だけで終わらなかったのは、『源氏物語』が、読者個人にとって人生史をうつす装置として働き、手に取ったときの年齢に応じた感慨を与える魅力的な作品であったからだ。

同じ人によって何度も読み返される作品こそが《古典》である。

『源氏物語』ファンは、若い女性の中にもいる。日本古典文学関係の開講科目数が多い本学においても、毎年度、必ず『源氏物語』を好きだという学生と出会う。そういった学生が、1, 2年生であったり、英文学科の学生であったりすることも珍しくはない。講義の中で受講生達に尋ねてみると『あさきゆめみし』の読破率が極めて高い。その他として、谷崎源氏、与謝野源氏、円地源氏があがり、村山リウ、橋本治、瀬戸内寂聴が、加えて田辺聖子と俵万智が続く。今後は、林真理子や大塚ヒカリの名もそこに連なるようだ（実は、稿者が初めて通読したのは、巻の冒頭ごとに和歌が付された与謝野源氏。勿論『あさきゆめみし』読者でもあった）。日本文学を専攻する学生を除けば、『源氏物語』を《原

文で丹念に読む》ということは考えられない時代なのだ。この点は若い読者層の特徴である。

若者の原文離れとは裏腹に、最近の『源氏物語』研究の一つの流れは、本文研究にある。

鎌倉初期の、藤原定家や源光行、親行の手が加わった本文の系統ではなく、平安時代に遡る本文の姿を伝える写本の存在が相次いで報じられている。個別に伝存する帖であることの多いこれらは、幸運にも今日まで伝わったものであるが、その背景には、伝本調査に力を注ぐ研究者の弛むことのない努力がある。詳細に調査研究した成果が公にされることで、かつて確かに存在した『源氏物語』本文を読み味わうという「原文の世界」ならではの楽しみがもたらされる。

本学のような教育現場では、繰り広げられている種々の文化現象や手に取りやすい書物を有効に活用し、学生達を「原文の世界」に誘うことが、大切だと感じる。例えば、川添房江『光源氏が愛した王朝ブランド品』や、吉海直人『「垣間見」る源氏物語 紫式部の手法を解析する』等は、ストーリーと人物造型のみに目を奪われがちな学生に一読を勧めたい。

『源氏物語』を核としてうず潮をなす文化現象はとどまることがないようだ。

気が向いたところから潮にのり、試しにうずの中心にまで進んでみる、というのも一興ではなかろうか。

参考文献：

- 『新訳源氏物語』与謝野晶子訳 復刻版 THE PRESS WOMAN LIFE 1995.
『谷崎潤一郎全集』第25巻 新々訳源氏物語 中央公論社 1968.
『源氏物語』円地文子訳 新潮社 1972. 新装文庫版あり
『田辺聖子全集』田辺聖子著 第7巻 集英社 2004.
『源氏物語』瀬戸内寂聴訳 講談社 1998.
『窯変源氏物語』橋本治著 中央公論社 1993.
『愛する源氏物語』俵万智著 文藝春秋 2007.(文春文庫) *解説は本学卒業生である東直子氏
講座源氏物語研究 第12巻 『源氏物語の現代語訳と翻訳』 おうふう
源氏物語別本集成刊行会編『源氏物語別本集成』 桜楓社(おうふう)
源氏物語別本集成刊行会編『続 源氏物語別本集成』 おうふう

川添房江『光源氏が愛した王朝ブランド品』 角川書店

吉海直人『「垣間見」る源氏物語 紫式部の手法を解析する』 笠間書院

飯田 祐子 総合文化学科教授

現代を生きる『源氏物語』

『源氏物語』は千年も前に書かれた物語なので、当時の文化や風習、社会のしくみやしきたりを知らないと理解できない部分も多いのですが、一方で、現代にも通ずる感情を生々しく読み込みうる作品でもあります。現代的な読み方では、やはり登場人物の想いが気になるもので、自分自身をも重ねつつ描かれた人物の内側に入り込んでしまいます。『源氏物語』は、たいへんな長篇だけに登場人物も大勢います。天皇家の血筋にありながら中心から外れる運命を背負った、類い希な美しさを持つ光源氏、そして光源氏が関わってゆく、それぞれに深く際立った特徴を持つ女性たち。近代小説の場合は、主人公が、物語の中心に据えられていますから、他の人物もその枠にふちどられています。私たちが入り込むのはたいがい主人公の内面で、主人公の側からその他の登場人物について眺めます。しかし、近代小説ではない『源氏物語』の場合、光源氏の視点は必ずしもすべてを覆っているわけではないようです。光源氏に愛される女性たちは、はっきりとした個性を持っていて、彼女たちそれぞれの内面に惹かれる読者も多いはずです。

『源氏物語』を現代語に訳した、与謝野晶子、円地文子、田辺聖子、瀬戸内寂聴なども、そうした読者の一人ではないでしょうか。彼女たちは、『源氏物語』で繰り広げられる優美な平安貴族の文化そのものにも、もちろん惹かれていたでしょうが、それだけでなく、現代に通ずる複雑な感情のあり様に深い関心を寄せてきたのだと思います。ここでは、そうした関心が小説にも組み入れられたものとして、円地文子の『女面』を紹介しましょう。

円地文子が『女面』に描き込んでいるのは、六条御息所です。六条御息所といえば、恋に没入しきれぬ強い自己意識を持つ誇り高い女性であるとともに、一方で意識の底に渦巻く苛烈な想いのため自らも知らぬ間に生霊となって、光源氏が関係した女性たちを延々と苦しめるといふ、『源氏物語』のなかでもとりわけ強い存在感を持った女性です。円地文子は、『女面』の主要な登場人物である梅尾三重子という未亡人を、六条御息所に重ねました。梅尾三重子は短歌雑誌を主宰しており、六条御息所について、次のように書いています。「藤

壺が男の中に自分を溶解し切ることで、男と和解した自分を育てて行く女であるのに反して御息所の内には男と溶けあって行けない鮮明すぎる魂が存在していた」。この六条御息所論が、『女面』の底流に響いています。

『女面』は、梶尾三重子の男性的なものに対する深い憎悪を、たいへん挑発的に展開した小説です。鍵となるのは、「父系の血」を断ち切るという企みです。そもそも、夫に裏切られるという経験をした三重子は、別の男性の子供を生むということではじめの復讐をしているのですが、物語の中心に据えられているのは、夫もまた息子も死んだ後になされた企みです。三重子は息子の死後、嫁の泰子とともに暮らしており、その泰子とともに企んで、泰子に言い寄る男を、彼に分からぬように泰子ではない女性と契らせ、自分たちだけの子供を手にするのです。『女面』が書かれたのは、昭和三十三年です。まだまだきわめて男性中心であった時代に、女の中に沈殿した男なるものへの憎悪が、思いもかけない奇抜な発想で物語化されており、驚きます。三重子と泰子は、姑と嫁ですから血の繋がりはありませんが、絡み合うように深く結ばれていて、同性愛的とすら語られています。女性同士の連帯をそれほどの密度で描いているという点でも、たいへんに新しかったらうと思います。六条御息所は、こうした、斬新で鮮明な女性性の源流に置かれていたわけです。

梶尾三重子の六条御息所論には、「藤壺の宮や紫の上が男をゆるす苦しみの中に自分のすべてを溶解して男の中に永遠の花を咲かせる女であるならば、六条御息所は男の中に摩滅することの出来ない自我に身を焼きながら、現実のいかなる行動にもよらず、憑依的な能力によって、自分の意志を必ず他に伝え、それを遂行させねばやまぬ霊女なのである」と、また「女性の抑制された自我の極限を伝統的な巫女的能力に統一して、男性に対峙させたものと思われる」とも記されています。円地文子自身の六条御息所に対する想いでもあつたらうと思います。『源氏物語』は、女性たちの物語ともいえ、いろいろな生き方を選んだ女性たちの誰かに自分自身を重ねて読むことのできる作品です。円地文子を通して浮かび上がった六条御息所の姿は、円地文子その人に、そして自己を抱えて苦しみながらも自分自身を生き抜こうとしている現在の女性たちに、確かに繋がっています。

浜下 昌宏 総合文化学科教授

「源氏絵」について

『源氏物語』は、イタリアのダンテ、イギリスのシェイクスピアなどとならんで、明らかに世界文学の金字塔の一つである。あのような壮大な長編が完成した11世紀初頭という時期の早さを知ると、現在のブリテンの中核であるイングランドの中世政治史の画期的事件であるノルマン・コンクエストが1066年であることとくらべてみても、日本文化の歴史的伝統に驚く。(もっとも司馬遼太郎風にあの頃の日本人と今の日本人とは別物と考えることも必要だが。) 私が、ヨーロッパの大学の中で有数の日本研究センターを持つライデン大学を1994年に初めて訪れたとき、トーマス・ハーバー教授の研究室にいた女子学生が『源氏物語』を専攻していると語っていたのを思い出す。

『源氏物語』を主題に絵画にされたものを「源氏絵」と呼ぶ。最近、明治の皇室侍医であったベルツ博士のコレクションの展覧会が、シュトゥットガルト(リンデン民族学博物館)よりの”里帰り”で大阪歴史博物館においても開催されたが、その展示の中に六曲の『源氏物語図貼交はりませ屏風』と題された江戸初期の狩野派絵師の手とされる、風格と品格あるすばらしい作品を眼にすることができた。『ベルツの日記』(岩波文庫)を読んでその教養人ぶりに感銘を受けていたので、予想通りベルツの眼の高さに感心し、源氏絵もまた世界美術の一角をしめることをあらためて認識した次第であった。

源氏絵の代表的な作品は名古屋の徳川美術館と東京の五島美術館に所蔵されている『源氏物語絵巻』19図であるが、その復元模写が1999年に企画され約7年かけて2005年秋に完成した。NHKがその経緯をドキュメンタリーとして放映したのでご覧になった方もおられるだろう。たびたび名古屋を訪れたことのある私は、名古屋という土地柄には芸術・美術は不向きなのだろうと思っていたのだが、ある日徳川美術館を見学してその所蔵品の質の高さに圧倒された。そのうちの一つが『源氏物語絵巻』であった。

復元模写という困難な作業の完成には敬意を覚えざるを得ないが、綺麗になった源氏絵を見ると少し不思議な感じがする。図書館本館の閲覧室にその復元作品と、その元になった作品の写真版画集の比較展示がされている。その両者のコントラストに驚くが、しかし、復元作品の色の鮮やかさは当時の中国趣味を忠実に表しているのだろう。今日の私たちの多くは、少し色あせた原本の方により味わいを覚えるのであろうが。展示を見ながら、「色あせる」「色はなやぐ」という二つのコトバを反芻した。あいまいさ、朦朧、中間色、間接照明、婉曲といった美(いわゆる「わび」「さび」「余情」にもつながる)を好む日本趣味と、輪郭が明確でくっきりとした(clear-cut)形態と色合い鮮やかさの中国趣味との対比を

考えさせられた。

西洋美学のトポス（伝統的な共通の論点）の一つに” ut pictura poesis” という用語がある。字義通りには「詩は絵のように」（鮮やかに描写を）というホラチウスの詩の一節をカテゴリー化したものであるが、要するに詩画比較論である。絵は詩の主題やモチーフを挿画として描き出し、原文の理解を助ける。しかし、絵は原書から独立してそれ自体として芸術作品を成す。源氏絵についても同じことが言える。『源氏物語』の本文から漂ってくるのは男女のあいだの心理的近接と遠近感であるが、それが絵画作品化されると空間として表象される。情感と空間的距離とはときに重なって、密なる情愛が空間的近接として現実化することもある。ときには矛盾して、空間的距離が情感のもどかしさを描き出すこともある。今回の図書館本館での展示で置かれていた「橋姫」を例にとってみよう。中央の透垣をはさんで左側が女の空間（居室）、右側がそれを覗く薫という男の空間である。独特の霞が残余の空間処理をしているのだが、それは薫の思いを乗せて境界を越えて姫君たちに向かっている。源氏絵に見る幾何学的な画面区分はいわゆる西洋美術的遠近法とは異なる。そこには情緒の粘着質の情愛が伝わってくるのである。原文テキストと源氏絵との関係は、挿絵でもあり、原文理解の補助のようなものでもあるが、こうして絵画作品として独立しているゆえに、仮に原文を未読かつ忘れてしまっても、私たちは鑑賞の時間に没頭できるのである。

（なお、源氏絵に関する最新の研究状況について知るには、『描かれた源氏物語』（三田村雅子・河添房江編、「源氏物語をいま読み解く」シリーズ第1巻、翰林書房、2006）が簡便であろう。）

井出 敦子 院長室職員

さまざまな『源氏物語』との出会い

高校時代に国語の副教材として配布された資料集で「源氏物語人物系図」を見たのがこの果てしのない物語との出会いと言ってよい。複雑に交錯した人間関係はなんとも不可解だった。系図に続いて各巻の主要な登場人物とあらすじも掲載されていたが、極度に簡潔なそれは、なるほどこういう話だったのかと私を納得させてくれるどころか、ますますわけがわからないという思いを募らせるばかりだった。

この人間関係がどのような物語に織り上がっているのかをある程度知ることになったのは、祖父宅の書棚に「谷崎源氏」（谷崎潤一郎訳『源氏物語』中央公論社 図書館には複数の版の所蔵あり）を見つけたからである。「わからなくても追求しない」と決めて読み通すことにしたのだが、それでも困難な作業だったことを覚えている。「谷崎源氏」は現代語訳とはいってもなかなか難しい。

隣に並んでいた原文（『源氏物語』1-6（岩波文庫）080/IW1d/V.128-133）に比べると、現代語訳はどうしても長くなってしまふものなのだとその時感じていた。だから、なだらかな日本語で読みやすく、歌には詩の形で解説がしてあって、でも字数が膨らんでいるわけでもない「瀬戸内源氏」（瀬戸内寂聴訳『源氏物語』講談社、1998 853.1/MU1W/V.1-10）の登場は衝撃的だった。平明でありながら、しかもお香のお稽古を通して有職故事としての源氏にも親しむようになっていた目にもずっしりと読み応えがあった。

「橋本源氏」（橋本治『窯変源氏物語』1-14 中央公論社、1991-1993 853.3/HA15B/V.1-14）は、光源氏を語り部として男の目から描かれた世界、そっちらから見るとそういうことになるわけか、といろいろ面白かった。もともとは巻名のみで本文のない「雲隠」（巻名で光源氏の死が暗示されている）に、紫式部の独白として創出された文章には氏の視点が凝縮されているようで興味深い。しかし式部を語り部として再開された「匂宮」以降には、どこか勝手が違うようなもどかしさを感じてしまう。匂宮か薫、あるいは天空から源氏が、男が語り続けていたらどんな物語が展開されていたのだろう。

「御法」（紫の上の死が描かれる巻）で、寿命の尽きる日が近いことを悟った紫の上が催した法華八講（法華経千部供養）の一日を、女として人として生まれたならば、叶うことならばかくありたいと思わせるような場面に描いているのが、「大和源氏」（大和和紀『あさきゆめみし』講談社 漫画のため図書館には所蔵なし、源氏研究の資料として例外的措置が取られることを年来願っている）である。紫の上や明石の君の思いが美しく昇華されていることが、とても嬉しい。

新しい訳との出会いは、新しい物語との出会いでもある。今は、主婦業と母親の介護の中で18年かけて綴られたという「上野源氏」（上野栄子訳『源氏物語』1-8 日本経済新聞社 発注中）の到着が待たれることである。

『源氏物語』ゆかりの地―須磨と明石

『源氏物語』誕生から千年という節目の年である今年、国内外を問わず『源氏物語』が注目されている。そのような年に、甲南女子大学に収蔵されていた『源氏物語』（梅枝巻）の写本が、現存する鎌倉時代の写本中最古のものであり、かつ今までの写本と異なる記述を持つものであることが判明した。

そして、この写本には勝海舟（1823～1899）の維新後の名前である「勝安芳」との蔵書印が押されていた。勝海舟は、1860（万延元）年に「咸臨丸」を指揮して渡米、1868（明治元）年に西郷隆盛と会見し江戸城無血開城に尽力したことで知られる、幕末から明治という時代の大きなうねりの中で活躍した人物である。軍人としてのイメージの強かった勝が平安時代の宮廷での恋愛物語を読んでいたことはとても興味深い。勝が『源氏物語』を読んでいる姿や光源氏に対してどのような感想を持ったのかなどを想像するのも楽しい。

勝海舟の口述記録である『氷川清話』（講談社学術文庫）には「おれは、文字（もんじ）が大嫌ひだ。（略）学問とても何も無い。たゞあの四、五年間、屏居を命ぜられたお蔭で、少々の学問ができた。源氏物語や、いろいろの和文も、この時に読んだ。」と言っている。

さて、時代と国を越えて今なお多くの人に読まれ続けている『源氏物語』は全54帖から成る。その巻名が地名となっているのが「須磨」巻と「明石」巻である。この両巻は物語中、光源氏のターニングポイントとなった場所として描かれている。「須磨」は讒言により官位を剥奪され、愛する者との別離を余儀なくされ、失意のうちに流謫する地である。「明石」は、源氏の子を宿し、後の栄華を支える明石の君と出会う重要な地である。

なぜ紫式部が須磨と明石という地を選んだのかという点は様々な先行研究がある。

須磨という地は、畿内の境界地であったこと、史実として在原行平・菅原道真などが左遷された寂しい流刑地であること、そして彼らのイメージを光源氏に重ね合わせることで人物像が具象化され、現実性を帯びてくることなどが理由として挙げられる。

明石は、経済的に豊かな播磨国にあり、その領主である播磨国守とは財力が豊富であった。つまり、光源氏の政界復帰を影で支える明石入道の財力に現実性を与えることが背景にあったと推測される。

このように様々な要因から選択され、描かれることとなった須磨と明石であるが、現在にも『源氏物語』ゆかりの地名が残っている。それは、須磨寺の平敦盛と熊谷直実の騎馬像が並ぶ「源平の庭」のほりにある光源氏が植えたとされる「若木の桜」からとられた

桜木町である。この桜は昔から幹が枯れるたびに新芽が出て、枝は若木の姿のままであると言われている。その愛らしい姿から、源氏が紫の上を想いながら植えた桜になぞらえられている。今もなお須磨の地には『源氏物語』の世界が息づいているのである。

「須磨」巻で「須磨には、いとど心尽くしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の中納言の、関吹き越ゆると言ひけむ浦波、夜々はげにいと近く聞こえて、またなくあはれなるものは、かかる所の秋なりけり」と在原行平に関する故事を引用しながら、光源氏が秋の須磨の海を眺める姿を描いている場面がある。

同じ秋の日、電車で揺られながら光源氏が見つめたであろうその須磨海岸にふと目をやると、沈む太陽が反射して真っ赤に染まっている。秋の侘しさと冬の到来を感じながら、光源氏の姿に思いをはせるのである。

東川 博子 文学研究科

「もののあはれ」の舞台

勤務していた高校の行事に「文学踏査」というのがある。文学ゆかりの地を実際に訪れて学習するというものだ。

『源氏物語』ゆかりの地として、印象深いのは長谷寺はせでらと宇治である。長谷寺では夏の暑い中、汗をしたたらせながら四百段の回廊を上りきると、十一面観音像が堂々とした、霊験あらたかさもありなんと思わせるお姿で坐していらっしゃる。山深い隠こもり口くの初瀬はつせにある長谷寺の舞台からは青々とした山々が見渡せて、爽やかに吹く風とともに日常の澱が散じていくような心持ちになる。ここは『源氏物語』の玉鬘たまかずらのくだり、長谷寺の観音様の霊験のおかげで玉鬘が源氏に存在を知られ、その後出世していくという話に登場する。ちなみに夕顔・玉鬘に関わる巻々は、藤原伊行『源氏釈』以下の古注釈では「並びの巻」として傍系に位置づけられている。

宇治の宇治上うじがみ神社は、十数年前は平等院などとは違って訪れる人もないひっそりと寂れた神社であった。木々に囲まれ森閑とした境内に、宇治川の流れの音が響いてくる。ここの本殿は鎌倉時代のものでわが国最古の神社建築という国宝である。拝殿は部戸しとみどや勾欄こうらんのついた寝殿造りの優美な建築である。物語中では、宇治十帖に登場する大君・中君の父、八の宮の山荘のモデルとされている。宇治川を挟んで反対側、

平等院のあたりは夕霧の別荘のモデルである。『源氏物語』浮舟の巻では二月雪の朝に、匂宮が浮舟をつれ出すくだりがなんともいえずロマンチックで、うっとりしてしまう。匂宮が浮舟を抱きかかえて小舟に乗せ、宇治川を向こう岸に渡る途中に「これが橘の小島」と言って二人で眺めるが、有明の月が空高く澄んでいるさまと、宇治川の水面の曇りなさとという背景と相まって、別世界にいるかのような儚さを感じさせる場面である。

生徒は「文学踏査」を体験して、自らの足で現地に赴き、自分の目を通して見えたもの、肌で触れたものが、形となり美となって心の中に存在し続ける喜びがわかるような気がしたと言っていた。『源氏物語』の世界に少し近づけたかなと思う、という感想もあった。

文学という眼鏡を通してその土地を見ると、実際の目に見える以上のものを見渡せる気がする。

昨年度、大学院の藏中先生の「日本文学特殊講義」で『源氏物語』を勉強しました。数え切れない程の論文を読んでゼミで意見交換をしましたが、毎週新しい気づきがあって、少しも倦むことがない充実した時間でした。まさに『源氏物語』という作品の重みだと思えます。

山田 梨絵 英文学科

シェイクスピア作品と『源氏物語』における女性像と恋愛

《序》

文学作品における評価として、「イギリスにシェイクスピアあり、日本に紫式部あり」といわれるほど、紫式部の『源氏物語』はシェイクスピア作品に匹敵するものと称せられている（ミルワード）。またこれらの作品は、今もなお多くの日本人によって愛読されている恋愛物語としても魅力的である。私は、高校時代に古典の授業で、『源氏物語』の口語訳をして内容について学び、その面白さに惹かれ興味を持っていた。大学に入ってからシェイクスピア作品についても学び、本や映画など自らも彼の作品に触れてきた。

本稿を書くに当たって、シェイクスピアについて調べていた時にピーター・ミルワード氏の論文に出会い、ふと『源氏物語』との関連性を知った。その中で特に関心を持ったの

が、『源氏物語』の英訳にシェイクスピアの英語が巧みに使われているということと、共通する女性像であった。そこで、この両者の作品にはもっと共通点があるのではないかと、特に作品中の「女性」に焦点を当てて調べ、また恋愛についても比較することにした。書かれた時代や国柄に違いがあっても、恋愛観や人間観、人生観には果たして共通するものはあるのだろうか…。まずは最大の共通点について何が挙げられるかを述べる。そして次に、これらの作品のメインテーマである恋愛における名台詞を紹介し、現代の恋愛とも比較しつつ、当時のそれぞれの恋愛事情を探っていこうと思う。世界的に有名なシェイクスピア作品と、日本が誇る恋愛小説『源氏物語』についての新たな発見を目指したいと思う。

1. 共通する女性像！？

『源氏物語』とシェイクスピアの最大の共通点は、女性像というところにあった。これからその理由を探っていこうと思う。

紫式部には彼女が女性だということからも、その表現法やその物語を貴く関心ごとには多くの女性的要素が見出せる。『源氏物語』全体に強調されているのは、光源氏という一人の男性主人公よりも、むしろ源氏の恋愛癖の対象としてのさまざまな女性たちである（ミルワード）。

ここでは、その中の光源氏の忍びの妻である夕顔と光源氏が仕立て上げた理想の妻紫の上について例を挙げる。穏やかで美しい夕顔は、光源氏の恋の相手となり結ばれるが、源氏を愛する他の女性の、ものの怪に取り付かれ息絶えてしまうという悲劇的な運命をたどる。一方、幼い頃に母親を亡くした紫の上は源氏に引き取られ、理想の女性に育てられ彼の本妻となる。しかし、源氏の女癖や孤独感に悩まされ、最後には彼に先立って病没してしまうという悲しい終わりを遂げる。

女流作家である紫式部は、一人の女性として、たとえ美しく、そして裕福であろうとも、広く男性が支配する社会に生きる女性の悲しいさまを描写している（ミルワード）。しかし、その姿から、そのような苦悩にも負けずに戦う女性の強さやひたむきさが伝わってくる。このように、主人公の源氏よりも、彼を取り巻く女性たちの生き様が印象的である。その生き様とは後で詳しく述べるが、実はこのような女性の姿やその描き方がシェイクスピアにも通じるものがあるのだ。

シェイクスピアの作品は、男性に比べ立場的に女性が圧倒的に弱かった時代に書かれたにも関わらず、女性の存在やその強さが積極的に描かれている。ジュリエット・デュシンベリーは著書『シェイクスピアの女性像』の中で、以下のように述べている。シェイクスピアの女性について語ることはシェイクスピアの男性について語ることだ。彼は男性と女性の世界を肉体的にも、知的にも精神的にも区別することを拒んでいるからだ（デュシンベリー）。

シェイクスピアは、男性を優位とし、女性を低く見ることを許さなかった。それゆえに、彼の作品でも、男性の主人公よりも女性の主人公の方に重きが置かれている（ミルワード）。これは、男性が理想の女性に特別な地位を与えてきたという中世から続く文化の影響もあるが、男女は当然に不平等であるとする当時の社会風潮に対する彼の反発が表れていると考えられる。また、紫式部と同じように、シェイクスピアは男性が支配する社会でそのように苦しむ女性に対して作品中で同情を示している。

☆弱きもの、汝の名は女なり。

Frailty, thy name is woman! (『ハムレット』2幕2場)

(ミルワード氏の指摘による)

☆女は薔薇のようなものだ。美しい花も一度開けばすぐに散ってしまうからなあ。

For women are as roses, whose faire flower / Being once display' d, doth fall that very hour. (『十二夜』2幕4場)

(ミルワード氏の指摘による)

☆花の盛りと見える頃には、もうその花は死んでいるのですから。

To die, even when they to perfection grow! (『十二夜』2幕4場)

女性の立場的な弱さやはかなさを描く一方で、以下のように女性の魅力や、強さも所々に堂々とシェイクスピアは作品に表している。

☆美しいバラが枯れることはない

...beauty's rose might never die (ソネット 第1番)

☆もちろん君の美しさはいつまでも君のものだ。

Nor lose possession of that fair thou ow'st (ソネット 第18番)

シェイクスピアは、社会的に弱い立場に置かれる女性の、隠された魅力や存在の大きさを、作品を通して訴えている。

以上のことから、シェイクスピアも紫式部も、作品中で悲しい女性像を描くことによって、女性の存在感を強調し、また女性への関心、激励を示すという彼ら両者の共通点が見出せる。

2. 恋愛事情—『源氏物語』編—

まずは、『源氏物語』の恋愛について述べる。「光源氏」という一人の男性を中心に、たくさんの女性との恋愛や結婚が描かれている。平安時代の上流貴族社会では、男性は「正妻」の他に、複数の「妾妻」を持つことが許されていた（山口）。現代と結婚形態が異なるため、今を生きる私たちには理解しがたい恋愛の部分がある。しかし、当時においても、一人の男性が法律上結婚できるのは、一人の女性に限られていた（山口）。そのため、一人の男性をめぐる「正妻」の座の争奪戦が繰り広げられ、多くの女性の切ない恋物語が生まれた。この『源氏物語』においても、色男の光源氏をめぐる、いろいろな女性のバトルや切ない思いが描かれている。例えば、「紫の上」は、正妻と同じように大事にされ、最高の待遇を受けていたが、法律上は「正妻」ではなく、「妾妻」の一人に過ぎない。だからこそ、光源氏の愛を失わないために努力し賢明に生きる、理想的な女性であり続けた。このように好きな人のために一生懸命になるという乙女心は、いつの時代でも共感できるものであると私は思う。紫の上は病で倒れて死ぬ前に自分の人生を、

「あやしく浮きても過ぐしつるありさまかな」

と、いつもどこかで不安を抱き、心の安まることのない不安定な人生だと嘆いていた。源氏の愛情が他の女性へと移り、自分から離れていってしまうのではないかという不安に取り付かれていた。こんな思いを抱きながらも、彼女は死ぬまで源氏を信じ、愛し続けた。

このように男性に支配されるばかりの自由のない生活で、一見私たちよりも恋愛に関しては不利なようにも見える。しかし、『源氏物語』をよく読むと、そこに描かれているのは誰よりも恋を楽しみ、恋を貫いた女性ばかりである。誰もが、自分がより幸せになるため

に恋をしている。そんな恋物語に、平安の人々は自分の恋を重ね、悩み、そして熱狂した。そして『源氏物語』が書かれて千年もの時が経た現代、私たちも、平安の人々と同じように恋に悩んでいる。いつの時代も本当の恋、幸せな恋を見つけるために悩む私たちは、その『源氏物語』の女性たちの姿に憧れや共感を覚える。そして、その不利な立場でありながらも、じっと耐えながら力強く生きる女性に励まされ、勇気付けられるのだ。

3. 恋愛事情—シェイクスピア劇編—

最後は、シェイクスピア劇の恋愛について述べる。シェイクスピアの作品は、400年にも渡って世界の人々を魅了してきた。作品中における恋愛の名台詞は今もなお多くの人々の共感を与えている。人間にとって恋愛とは永遠の神秘である。そんな恋愛をシェイクスピアはどう語っているのか。

☆Love looks not with the eyes, but with the mind... (『真夏の夜の夢』1幕1場 234行)

恋人の姿は目ではなく、心の中でつくられるもの。

☆But love is blind, and lovers cannot see the pretty follies that themselves commit. (『ヴェニスの商人』)

しかし、恋は盲目であり、恋人たちは自分たちが犯す愚行に気づかない。

シェイクスピアによると、恋する人間 (lover) は「想像力 (imagination) の塊」であるようだ (中野)。自分が恋した人は、誰よりもよく見えるものである。それは、愛する人の姿を目でありのままに見ているわけではなく、心の中にある理想像を当てはめているだけだと言っている (中野)。確かにそうかもしれない。空想を膨らませ、相手のさまざまな魅力を創造してしまうのである。しかし、こういった相手の美化や妄想を膨らませて楽しむことも恋愛の魅力であると私は考える。そう思うと恋愛はとても奥深く面白い。また、障害をいかに乗り越えるかという、恋愛における永遠のテーマが描かれていたり、そして男女が対等な立場で自由に恋愛をしているという印象を受けるところに現代人もシェイクスピアの恋愛観に共感を覚えるのであると考える。

《結論》

シェイクスピアも紫式部も、男性が支配する社会での悲しい女性像を描いており、女性の存在感の強調、また女性への関心という共通点が見出せる。よって、両者の女性に対する見解や位置づけが似ているということが分かる。書かれた時代や国柄は違うが、「女性像」という観点において大きな関連性をもっているのである。

『源氏物語』に出てくる女性たちは不安や悩みを抱えながらも好きな人を信じ、愛し続ける。その中で恋を楽しみ、恋を貫くのである。自分がより幸せになるために恋をしている。同じように恋に悩んでいる現代の私たちも、彼女たちに共感でき、またこのような気持ちは女性として忘れたくないものである。

最後に、シェイクスピアは「恋する相手は想像力の塊」だと大胆な発想を示すが、これはすごく的をついていると考える。つい相手のさまざまな魅力を創造してしまい、誇張してしまいがちである。しかし、その中で人は恋をして楽しみ、幸せをつかむのである。現代にも通じる恋愛観を示すシェイクスピアに学び、そして共感する部分は多い。恋愛は時代を超えても普遍的なものである。だからこそ、『源氏物語』もシェイクスピア作品も、現代人が自分を重ねてそれらの作品に入りこむことができ、魅了されるのであると思う。

主要参考文献・資料

- ・ジュリエット・デュシンベリー『シェイクスピアの女性像』、森祐季子訳、1994年、紀伊國屋書店
- ・中野春夫『シェイクスピアの英語で学ぶ ここ一番の決めゼリフ』、2002年、マガジンハウス
- ・ピーター・ミルワード 基調講演「シェイクスピアと源氏物語」
<http://www.angel-zaidan.org/genjiforum2006/milward.htm>
- ・山口仲美の言葉 & 古典文学の探検
<http://www015.upp.so-net.ne.jp/naka0930/index.html>

<研究室から>

山本 義和 環境・バイオサイエンス学科教授

私の研究室では「水圏環境科学」を看板に掲げて、学生たちと共に30年間研究を続けてきました。私自身は幼少の頃から中学生くらいまでは、父に連れられて海や川へ魚釣りに出掛ける機会が数多くありました。朝4時台の始発電車に乗って海に向かったことなども今となっては楽しい思い出です。このような体験が海や魚に関心を持つきっかけになったと思います。また、大学生時代には、激しい環境汚染の影響で水俣病や四日市ぜんそくなどの公害病が発生して、多くの人命が失われ、野生生物の大量死が起っています。その当時は、このようなことが許される社会であっていいのかと強く思っていました。これらのことが背景にあって、人間の諸活動と環境問題、環境汚染の水生生物への影響、環境汚染と食品の安全性などの諸問題に関心をもって研究を始めたと思います。その後、いつの間にかそれが仕事になって現在に至っています。

主な研究対象水域は海や河川で、水、底泥、魚や貝などを研究試料として重金属や人工化学物質による環境汚染の現状を調査・研究しています。また、これらの物質の水環境中の運命を追跡し、環境汚染物質が魚類、貝類、海棲哺乳類、水生植物等の生命現象に及ぼす影響を調べてきました。具体的には指標生物やバイオマーカー（生体内で環境指標性を有する生理活性物質の総称）を利用して環境のモニタリングをおこなっています。

最近では、下水処理場から排出される環境ホルモンに注目した研究、今では絶滅危惧種の扱いを受けている野生メダカの保護育成に関する研究、京都府舞鶴湾の鉛汚染に関する研究に力を入れています。特に、舞鶴湾の一部の地域で信じられないくらい高濃度の鉛で汚染された海泥や貝類の存在が明らかになったので、強い関心を持って研究を進めています。また、それと同時に現代社会でもこのような公害が現実に行っていることに頭を痛めています。

環境・バイオサイエンス学科では3回生からゼミに所属します。3回生の間は、ゼミ生全員で環境問題に関する英語の論文を読んだり、各自が関心のあるテーマについて調べて、発表したり議論したりしています。また、4回生での卒業研究の準備として、先輩の研究中間発表を聞いたり、基礎的な実験もしています。4回生になると研究テーマに分かれ、論文や資料を読みながら私や教学職員の江口さんと相談して研究を深めます。ここでの主役はもちろん学生さんです。

環境科学に限らず多くの実験系の研究領域では、個人力だけでは十分な研究成果を上げることが難しいものです。私の研究室でも、調査・研究や実験で労苦や喜びを共にした

教学職員や多くの卒業生がおられます。この機会に厚くお礼を申し上げます。

<史料室から>

佐伯 裕加恵 史料室職員

神戸女学院の寄宿舍生活

神戸女学院はアメリカ人宣教師が始めた女子のための寄宿学校です。明治時代、外国人の経営する寄宿学校というと、皆さんはどんな学校を想像されるでしょうか。すべてが西洋式のハイカラな生活？—当時の日本人もそう思っていました。

「我院が米国人を院長に仰ぐより、さぞかし萬事新進且つ進取主義の学校ならんとは世の人のまづ目するところにして、寄宿舍にて食事は洋食なりや、或は就眠は寝台の上にてか、居するにも椅子、向ふに卓ありや、とは度々尋ねらるゝ質問なり。」とある生徒も書いています。（『めぐみ』第60号、1915年9月発行）

では実際はどうだったのでしょうか。「答は只否一つあるのみ。」（同上）

寄宿舍の生活は純和風でした。しかも大正時代になってもずっと変わらず…。ということで今回は、明治時代からずっと変わらず続いていた寮生活の様子を1914年の生徒の手記（『めぐみ』第59号、1914年12月発行）を中心にのぞいてみたいと思います。（『めぐみ』の記事は原則そのまま転載するが、旧字は現代字に改め、必要に応じて旧仮名使いを書き換え、句読点等の追加を行なっている。[]内は編者の加筆である。）

「規則などは昔と大差なく、午前六時十分前に起床。髪を結び、顔を洗い、静座して祈禱をし、聖書をひもとく。間もなく朝御飯。」

寄宿舍の朝は早起きから始まります。当時は和服に日本髪でしたから、髪を毎日整える必要がありました。結髪所（今の美容院のような所）が寄宿舍内にあって、そこでは生徒同士がお互いの髪を結び合っていたそうです。上手に結うことのできる上級生は人気があって、お正月など特別な日には予約が入っていたとか。

「女学院でおいしいものゝ一つなるおみおつけにて御飯をいたゞくと、直ちに掃除に御座候。」

ご飯にお味噌汁、質素な朝ご飯ですね。食事の準備は当番制でした。1896年の回想によると、年長者、上級生が朝早くから準備をし、片づけまでしていたそうです。しかしこ

の頃になると寮生の数も増えて、数が多いので、炊事を習うというよりはただ労働しているに過ぎないと思えることもあったというような状況だったようです（『めぐみ』第14号 1896年8月発行）。

「八時半より礼拝、九時より午後三校時四校時迄で一生懸命勉強して、五校時は運動に参ることツの楽しみに候。」

授業は朝一番の礼拝に始まって、最後に運動。体操や球技（テニス、バスケットボール）も早くから取り入れられていました。

「五時に夕御飯にて、六時半より九時十分前迄で勉強時間にて、広い寄宿舍中、水を打ちたるように静かに御座候。」

ずいぶん早い夕食ですね。自習時間がたっぷりとられていたようです。

「八時に夜の祈祷会あるは皆様御存〔知〕の通り。」

今でも寮には夕拝があります。ずっと伝統が続いているのです。

「かくて九時半にはあたゝかき床の中に、夢はある時は故郷に、ある時はお友達の許にはしり申候。」

早寝早起きの寮の一日、いかがでしたか。ちなみにこの手記が書かれた1914年年末まで寮では電燈ではなく、ランプを使っていたそうです。

<AVライブラリーからのお知らせ>

西野 美香 視聴覚センター職員

1.特別貸出について

図書館/AVライブラリーでは冬休みの期間に合わせて、特別貸出を実施します。実施期間や冊数等の詳細が決まり次第ライブラリーのWEBページや掲示にて告知しますので、ご利用ください。

2.上映会報告

2008年10月6日(月)から9日(金)までの4日間、図書館主催の映画上映会を開催しました。上映作品は、『食料の未来を確かなものにするために』と『北極のナヌー』の2本

で、どちらも環境問題をテーマに作成されたものです。

今回の上映会は、学生のグループ「KCU」が学部や学年を超えて交流できる場を提供していきたいという活動の一つの試みとして映画上映会という話が持ち上がり、そこに端を発し、学生と学校側が話し合いを重ねる中、図書館が全面的に協力する形で、実現へと至った上映会です。

初の試みであったこと、上映時間が授業時間中であったことなども重なり参加者は少なかったのが残念でしたが、学生と2回目の上映会に向けての話し合いも始まっています。次回開催の折には是非ご参加ください。

著作権の関係で、希望の作品すべてが上映可能という訳ではありませんが映像というメディアを通して、豊かな交わりの時が提供できればと願っています。

3.語学ソフト入荷！

AVライブラリーでは、語学学習を支援するソフト/書籍を多数揃えていますが、今回は上西先生に選書していただき、フランス語関連の書籍がたくさん入荷しました。語学学習のソフトの中には、「もえがく★5」というアニメとスタジオが一体となった番組のDVDもあります。あなたも魔女っ子もえちゃん、アーヤお姉さんと一緒に、フランス語を学んでみてはいかがでしょうか。また、単なる語学学習目的の物だけではなく、映画や世界遺産のフランス編、ワイン紀行なども入荷していますので、是非活用してください。

AVライブラリーの授業期間中の開室は、月曜日から金曜日の9:30-18:00です。授業期間以外については、随時掲示していますので、そちらをご覧ください。

<神戸女学院大学図書館架蔵フランス語書目雑談Ⅱ

—V・ユゴー『クロムウェル』初版本（1828年）について—（その2）>

柏木 隆雄 大阪大学名誉教授・放送大学大阪学習センター所長

1. 初版の体裁

神戸女学院大学図書館に収まっているフランス文学関係の書籍について、私個人の思い出を含めた「雑談」は、その第一回、あまりに思い出に耽る言葉を連ねて、肝心の書目に関しては、ほとんど一語も触れること無しに終わった。前回、名前を出しただけに終わったヴィクトル・ユゴーの『クロムウェル』初版（1828年刊）について稿を継ぎたい。



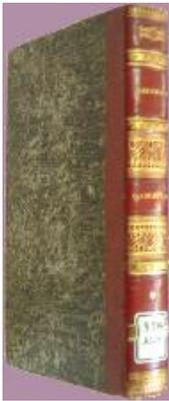
この稀覯書は、図書館の地下の所蔵庫、フランス語・フランス文学関係の書物が並ぶ棚に、それほど目立たない形で収まっていた。禁帯出の札もないので、容易に取り出して見ることができる。図書館への登録日時が扉のところに押されているのを見ると、平成2年（1990年）2月25日とあるから、実はこの本、私の退職後に購入されたもので、恐らくは泉敏夫先生か上西妙子先生かが、あるいはお二人ご相談の上、お買いになったのだろう。当時としても一冊の本としてはかなり高額のものだったに違いないから。

書誌的なことからまず記せば、版元は Ambroise Dupont et Cie、1828年の出版で、序文64頁のほかに本文476頁。体裁はいわゆる八つ折り判、時代ものの背赤色羊革装丁で、金箔押しタイトルと飾り線が付けられている。透かし入り紙に印刷され、初版1075部の一冊である。扉の題字には CROMWELL「クロムウェル」とありその下に DRAME「ドラマ」とあって、VICTOR HUGO 作とあり豎琴の図が付されている。そして出版地パリが刻され、版元 Ambroise Dupont et Cie 書店の名が記されるが、その下に、De Norvin 著『ナポレオン伝』の出版社であることを示す語が続き、その所在ヴィヴィエンヌ通り18番地とあって、出版年1828が最後に来る。実際の刊行は1827年12月

5日である。

その前の頁には同じ著者の作品として、「オード」2巻、18折判、「オードとバラッド」1巻、18折判、「ヴァンドーム広場記念円柱に寄せるオード」仮綴じ小冊子、18折判、「アイスランドのハン」4巻、12折判、「ピュグ・ジャルガル」1巻、18折判が縦に併記されている。18折判は岩波文庫程度の小さい判である。しかし、天才詩人として若くして名をなしたユゴーの颯爽とした英姿が、その列記に髣髴とする。

2. 扉の表記に見る仕掛け



この題字の収まった扉は、そのまま見過ごせば、なんでもない、ありきたりのタイトルを示した扉と見えるが、しかし CROMWELL の下に DRAME とあるのは、すこし注意して見なければならない。当時フランスの劇界は、十七世紀古典主義理論に則ったいわゆる「三一致の法則（或いは三単一の法則）」、すなわち舞台上で展開する劇世界は、一日を超えてはならず（24時間以内に、とも太陽が昇って没するまでの間ともいう）、舞台となる場所は、一箇所に限定、主たる劇行為（いわゆる筋書き）もまた単一で、他の副次的行為（脇道にそれる筋立て）もすべて主筋に従属すべきとする規則を遵守していた。古典劇理論を完璧なまでに実践して、その美的効果を挙げたのは、ラシーヌの『フェードル』、『ブリタニクス』といった傑作が代表的なものとされるが、その威光は150年近く隔たった19世紀初頭のフランスにおいても古典主義者たちによって厳密に守られてきたのだ。

しかし18世紀になって、たとえばディドロが先鞭を付けた「市民劇」は、従来の悲劇が主として古代ギリシャやローマの神話の人物、英雄たちを主人公にしたのと異なり、一

般のブルジョワ社会に見られる情念や運命の葛藤を主軸として、それらを「ドラマ」と称した。それは従来の古典主義演劇に対する一つの革新的な試みであったことを知ると、ここでユゴーが TRAGEDIE「悲劇」とせずに DRAME「ドラマ」と自らの戯曲を定義しているのは、それなりの大きな意図があると見るべきで、1830年の衝撃的な Hernani『エルナニ』による旧派の古典主義者たちへのメッセージは、ここにおいてすでに発せられていると見るべきだろう。

そしてまたそのことは、下段の発行者の名前にも読み取ることができる。すなわちド・ノルヴァン著『ナポレオン伝』の出版社であることを示されているのは、もちろんありきたりの宣伝を兼ねた表記には違いないが、しかし同時にこの劇がまさしく当時盛んになっていた「歴史劇」の範疇にあることをも示唆するものにほかなるまい。クロード・デュシエが「クリュブ・フランセ・デュ・リーヴル」版『ヴィクトル・ユゴー全集』第3巻所収の『クロムウェル』の解説に、「この劇は、〈序文〉が有名ではあるが、まず何よりも〈歴史劇〉なのである」と冒頭に述べている通り、1819年に発刊、多くの読者を得たヴィルマン著『クロムウェル伝』やギゾー『英国史』（1826）で、当時の革命、帝政、王政復古と目まぐるしく変わる政治状況は、隣国イギリスの歴史、とりわけピュリタン革命の立役者クロムウェルへの関心を高めた。若者たちの彼への興味はいっそう盛んで、メリメ、バルザックなどもその文学的出発にクロムウェルを題材にした劇を企図した事実を窺うことができる。

3. 父レオポルド・ユゴーの影

しかし出版社アンブロワーズ・デュボンが、『ナポレオン伝』を発行していることを示す字句は、必ずしも、この書が「歴史劇」を標榜するものだという意味を込めるばかりではない。扉の頁を繰って次に移れば、「わが父に」と大きく献辞が印字されて、「著者がその身を捧げるように、この書が彼に捧げられんことを」と続き、V.H.1827 と署名されている。ユゴーの父親レオポルドがナポレオン軍の有能な将軍であったことがたちまち思い出される仕掛けも施されているのである。ユゴーと父親との関係は、母親を見捨てて愛人と異国で暮らしていることに反発した少年時代、そしてその母親が亡くなって、父との和解がすんだ1821年以降で大きく変化する。この『クロムウェル』が発刊されたのは父が55歳の時。

よく知られているように、護国卿クロムウェルは、国家の父とも称され、さらにまたユゴーのこの戯曲においては、父クロムウェルとその息子たちの葛藤も描かれている。ユゴーの献辞は、戯曲の内容に関しても、その成立に関しても、なかなか意味深長なものを、

ある意味で、戦略的に含んでいると見るべきだろう。この父は本が出版されたほぼ2カ月後の1828年1月29日に脳溢血の発作で死亡。ユゴーが序文をしたためたのは1827年9月30日から10月25日のほぼ一カ月足らずで、献辞はおそらくその後で書かれたものだろう。しかし「著者がその身を捧げるように、この書が彼に捧げられんことを」と書かれてある原稿には、その端に自筆で、「再版の際には、この二行は抹消すること」と注記されているという。(Michel Cambien, note dans Préface de Cromwell, éd. Classiques Larousse, p.27, 1971)このこともまた戯曲を考える上でも、ユゴーの父親との関係を憶測する上にも、興味深い問題を提示するかもしれない。いずれにしても一見当たり前の扉の表記や献辞の言葉使い一つとっても、なかなか示唆するものの多いことがわかるだろう。本はその体裁もまた「テキスト」でもあるのだ。

献辞の頁を繰ると次は白紙で、その次の頁からフランス文学史上、有名な「序文」がPréfaceと書かれることなく、すぐさま書き出されている。この序文は先にも書いたように64頁分綿々と書き連ねられている。そこには後に覇を唱えるロマン主義演劇の基本的な主張が盛り込まれていて、このテキストだけで、さまざまな注釈書が刊行されているほどだ。それらはシュレーゲルやコランタン、スタール夫人、スタンダール、マンゾーニといった先人の説を踏まえるが、ユゴー自身の、たとえば「グロテスク」を主張するところなど独自の見解が、力強い調子で宣言されて、旧派の古典主義演劇論者に鋭く挑戦する。これは友人たちの前で朗読され、喝采をもって迎えられたという。

また、この戯曲自身については、もともと当時の名優タルマを当て込んで執筆したものだが、彼の死によって、若い詩人のもくろみは潰え去った。序文同様、劇そのものを朗読して聞かせたとも言うが、全編ではなかったろう。少なくとも上演にはたっぷり2日はかかるはずだ。しかしながら、この序文の意義について、また7500行に及ぶ長大な5幕韻文劇の内容や本領を詳しく説くことは、与えられた一回分の分量では尽くすことができない。

もともと所蔵書目の紹介という本文の本来の目的からすれば、『クロムウェル』の内容紹介や文学史的意義を詳しく論じるのは他日を期して、以下に初版本蒐集について、いささか蛇足の感を付け加えて稿を終えることにしよう。

4. 初版本の蒐集について

先にも記したとおり、この貴重なユゴー『クロムウェル』初版本を神戸女学院大学図書館に購入したのは、私ではない。私が神戸女学院に奉職していた頃は、私は初版本にそれ

ほど興味も執心もなかった。初版本はいわば骨董趣味で、稀覯本を集めることは、内容よりもその古さであり、また古さにも関わらずその美しい初版の状態を保っているのを、あたかも李朝の壺を撫で楽しむ具合に愛玩するようなもので、本来の研究者の態度ではない、と考えていたのだった。もちろんそればかりではない。それはいわば痩せ我慢の理屈で、初版本一本を購えば、たちまち年間の個人研究費を一度に使い切ることになるか、あるいはその一本をも買えぬ仕儀となることも、初版に目を向けぬ一因だった。私が勤務したのは1975年から1983年春までだが、個人研究費は組合の交渉の末、少しずつ上がって、やっと20万円くらい。それでは到底高価な初版本を買うことはできない。

しかしフランスに留学させて頂き、初版本にしばしば触れる機会ができて、それが単に骨董的な価値だけでなく、上にも述べたような、読み方さえ知れば、貴重なテキスト上の情報を満載したものであることがしみじみ実感されるようになった。私は研究の素人だったのである。すこしずつ私の蒐集に初版本が混じるようになった。それは一つにフランがどんどん下落して、私が学生のころ、1フラン80円くらいだったものが、神戸女学院大学に入る頃は1フラン45円くらい。それがますます下がって1フラン20円となり、最後は17円くらいになったのではなかろうか。高価だった古本がかなり手頃な値段となり、またパリのオテル・ドルオーで開かれるオークションの仕組みもわかると、私のような素人も思いがけなく、掘り出し物を手に入れることができるようになった。(露伴の『骨董』という名品を読むと「掘り出し物」というのは元来忌むべき言葉だそうだが)。そして日本政府も円減らしのために、たくさんの高価な外国のコレクションを各大学の図書館が購入するように旗振りをした。現在、各地の大学や公共図書館に豪華な、またと得難い有名学者や文人のコレクションが、奥深い書庫の暗闇に誰も手に触れられないままにひっそりと金文字を輝かせている。しかしここ数年、あっという間にユーロがほぼ3倍近くに跳ね上がり、昔を知る者には、ちょっと馬鹿らしく、手を出したくない時期が続いた。もっともここ数週間、120円以下で推移していて、また食指が動いている。

このユゴーの初版が禁帯出の札も貼られずに並んでいるのを驚いたと前回記したが、それはこの本の貴重さを強調するためではあるが、同時に、その扱いが正当であることも言いたかったからだ。本はむやみにスタンプを押したり、レッテルを張ってしまえば、その価値を損なう。しかしそれは実はたいしたことではない。大事なことは、本は読まれて初めて役を果たす、ということだ。禁帯出を張られてしまえば、誰も手に取るような気は失せるだろう。本というものは丁寧に扱えば、そんなに無闇に壊れるものではない。(私自身も手に取ってつぶさに見せて頂いた。ただ不思議な縁で、図書館の初版本を見せていただいたすぐ後でフランスから届いたカタログに同じ初版が出ていて、運良くその一本を贖うことができた。これなどはまことに不思議なことのように思えるかもしれないが、実は念ずれば通ず、で、ひょんな機会がひょんな機会をまた連れてくるのである。) といえ、ど

んな不心得者がいるとは限らない。貸出しはやはり遠慮願って、丁寧に見ていただくという方法しかないだろう。ただ、むやみとお宝だと祭り上げて埃にまみれさせないようにしたいものだ。

いまコンピューターで全国の図書館の蔵書を調べれば、おそらく膨大な初版本が画面に出てくるだろう。それらが書庫奥深くしまわれて、誰の目にも永遠に触れることがないような事態になっていないことを祈るばかりである。昨年夏、パリの古本屋である貴重な初版本を見つけたが、値段が折り合わない。ためらっていると、店主は「これは貴重だ。しかもこの本はおそらくまた日本の図書館や博物館で購入されることになるだろう、そうすると誰の目にも触れることなく、読まれることもなくなり、またそれが市場に再びでることがなくなって、ますます手の出なくなる高価で貴重なものとなる。あんたが買ったら、あんたが読んで、またその本が市場に出て必要な人の手に渡るのだよ！」と私の考えと同じことを言う。それでは、とその本を買ったのだが、あるいはその老店主の口車に乗っただけかもしれない。

—携帯電話で蔵書検索ができるようになりました—

9月16日より図書館システムの機種変更を行い 次のような新機能が加わりました。

- 検索項目が増え、より細かく検索ができます。
- 絞り込み検索ができます。
- 全国の大学図書館等の総合目録（NII）も同一画面で検索できます。
- 検索結果をファイルに保存したり、メール送信することができます。
- 携帯電話、インターネットから蔵書検索だけでなく、個人の図書館利用状況の確認、貸出中圖書の予約もできます。

図書館本館展示のご案内

このたび図書館本館閲覧室では、「遊びにみる源氏の世界～源氏物語千年紀によせて～」と題し、「お香」と「投扇興」のお道具を12月22日(月)まで展示しております。(尚、お道具は特集記事にご執筆いただいている院長室職員・井出敦子さんよりお借りしました。) いずれも『源氏物語』五十四帖にちなんで楽しむ遊び道具です。雅なお道具からは昔から現在に至るまで『源氏物語』がいかに私たち日本人に親しまれ愛され続けてきたかを伺い知ることができます。

また『源氏物語絵巻』第三・四巻(徳川本・国宝絵巻の複製)や藤原弘子氏の「ツイン染」皮革作品等も展示しております。この機会に是非本館閲覧室にお立ち寄りください。